第十二章　予測不可能な事態

1

正午の時報が天井のスピーカーから流れると、壁に埋め込まれた電子レンジ状のフタが勝手に開き、なんとそこに、ほこほこと湯気をあげる味噌汁の付いた天ぷら定食が出現した。

「みんなの部屋にも届いてるんじゃないか？」

萠黄もむんも伊里江もそれぞれの部屋に戻ってみると、確かに各人の分が到着していた。壁の中に配膳エレベータがあるのだ。

「これがインテリジェントビルってぇ奴かな」

久保田はしきりに感動していたが、萠黄には〝ハイテク刑務所〟としか思えなかった。

「美味しい」

四人は久保田の部屋に集まって昼食を囲んだ。食欲はなかったが、むんのひと言につられて萠黄も箸をつけてみた。

本当に美味しかった。天ぷらのからりとした揚げかたといい、味噌汁の味付けといい、文句のつけようがな

かった。ファミレスやコンビニの比ではない。ここには一流の料理人がいるようだ。
「悔しいが腕は俺サマより上みたいだ」
久保田がうなり声を揚げた。
萠黄は茶碗蒸しの温かさを手の平に感じながら、ついさっき終わった記者会見の模様を思い出していた。
『リアルを殺してください』
後は同じ文句を繰り返すばかりだった笹倉長官。彼は目の前のテーブルに何度も額をこすりつけ、痛々しいほどにお辞儀を繰り返し、国民に懇願した。
しかし会見は唐突に終わりを告げた。政府が差し向けた屈強な男たちによって、笹倉はカメラの前から連れ去られたのだ。だが皮肉にもそれが、笹倉の信じがたい話に真実味を持たせる結果となった。
チャンネルを換えてみた。どの局も総理の釈明を求めて、国会周辺に押し寄せる群衆をレポートしていた。さらには『笹倉発言の真偽を探る』と称して、有識者を集めた緊急討論会を早々に開いた局もあった。
「こりゃ、大揺れに揺れそうだな」と久保田。
「他人事じゃないですよ。こうしている間にも、どこかでリアルが……」萠黄が非難めいた口調で言う。
「判ってるよ。しかし今は虜囚(りょしゅう)の身だ。ジタバタしたって始まんねえ。それより、食えるときはしっかり食う。

これが生き残るコツだ」
生き残る――。
果たして、日本中に散らばるリアルたちは、こんな逆境のなかで生き延びることができるのだろうか？
いや、反対に、自分たちこそこの世界を破滅に追いやる存在であると知って、煩悶（はんもん）しているのではないだろうか。
助けなければ。
リアル同士助け合わねば。そして全員をここに集め、元の世界に送り返してやらねばならない。それが自分の使命なのだ。
萠黄は勢いよく箸を置いた。
「ごちそうさま！」
「おお、全部食ったな。それじゃ解放してやろう」
「……私も行きます。リアル候補に集合かける手配をしなければいけませんしね」
伊里江も続こうとする。
「青年、まだ残ってるぞ」
「……それどころでは」
「四分や五分でどうなるものでもあるまい。昔の偉い人は言った。一口残す者は一杯の飯に泣くとな」
「……しかし」
「ええよ、エリーさん。わたし、先にノートパソコンの

修理をせなあかんから」
　萠黄は空になった食器を返却用のエレベータに入れると、重いリュックを背負って部屋を飛び出した。
　同じ階にあるという工作室。萠黄はそこに向かった。
　地下十階は、全ての部屋が短い直線距離の廊下を向いていた。萠黄は片っ端からドアを開いては中を覗いていく。
　ほとんどの部屋は空っぽだったが、五つ目にしてようやく工作室を発見した。といっても六畳ほどの空間に木製テーブルが2つ、アングル棚に大工道具や電気工具が雑然と置かれているだけだった。
　萠黄はリュックを降ろし、銃弾を受けたＰｏｗｅｒＢｏｏｋを取り出した。ドライバーを手に持って、丁寧に分解を始める。
　筵潟（むしろがた）教授宅では、電源が入らないことだけは確認してあった。どうか記憶ユニットが無事でありますように。祈りつつキーボードを取り外すと、どうやらＨＤＤ（ハードディスクドライブ）は無事であることが判った。
　とりあえず安堵のため息をつくと、リュックのポケットで携帯が鳴った。すかさず取り出して開く。
《ようやくひとりになったんだね》
　思ったとおり、相手はキングギドラだった。
「取り込んでたもんでね」

《随分とへたれてるじゃない。お疲れかい？》
「ご覧のとおり」
萠黄はだるそうに机の上に上体を起こし、ＨＤＤの取り外し作業にかかった。携帯は開いたまま机の上に置いた。
《女の子なのに機械に強いんだね》
ギドラが意外そうに言った。さすがに怪獣の表情までは読み取れないが。
「それ、学校でもさんざん言われてきたセリフやわ。とうとう怪獣にまで言われるなんてね。あんたたちの仲間でもメスは機械音痴なん？」
《アハハ》
さすがに冗談と理解したらしい。ギドラはただ笑っただけだった。
ＨＤＤを本体から持ち上げる。するとその下から焦げたように黒ずんだ銃弾が出てきた。先端がロウソクのように溶けて固まっている。
（銃弾が貫通しなかったのは、わたしのリアルパワーのおかげでもあるみたい）
ふと疑問が浮かんだ。
パソコンを盾に最初の銃弾を防いだ後、サキはもう一度、萠黄を撃った。その直前、ランプの魔法使いのごとく携帯からモジとギドラが現れて、萠黄を守ってくれよ

うとした。
そうだ、ギドラはわたしに――。
「ねえ、あの時、銃弾に集中しろって言うたよね。あれはどういう意味やったん？」

2

《は？》
ギドラは三本の首を、同じ角度で器用に傾けた。いや、CGキャラなのだから、そんな動きはいとも簡単か。
「忘れた、なんて人間みたいなこと言わんといてよ」
萠黄はHDDとCPU（中央処理装置）を結ぶコネクタを抜き取る手を休めて、携帯を目の高さに持ち上げた。
「問い詰めようというんやないよ。逆にわたしは感謝してんねんで。だって、おかげであの時、蜂の巣にならんですんだのかもしれんし」
《恩人？》
「その称号をあげることには反対せえへんわ」
《だとうれしいね》
「話を逸らさない」萠黄は断固とした口調をにじませつつ「相手の攻撃に全神経を集中することは、リアルが身を守るための基本。それをあんたはグッドタイミングで忠告してくれた。なんで？」

するとギドラは屈託なく答えた。
《だって、あのひょろっとした青年クンが、島の地下で米軍に撃たれた時、言ってたじゃないか。『リアルも不意打ちを食らうと怪我をしてしまうらしい』》
それは伊里江の言ったセリフだった。口真似どころじゃない。明らかに録音されたものだ。
萠黄は呆気にとられて、まじまじと携帯を見つめた。
《例えるなら、回避不可能な事故に遭遇した時、身体が防衛反応を起こして筋肉が引き締まったりするだろ？リアルの防護バリアもそれと同じかなと思ったのさ》
「防護バリア？」
《ボクの造語だけどね》
確かにあの一瞬、自分を包む目に見えないものの存在を感じはしていた。しかし――。
そんなことより、萠黄は今、自分の疑問を忘れてしまいそうなほど強く感心していた。感動といったほうが近いかもしれない。
ギドラの知能は彼女の予想を遥かに超えている。
「あなたは自分だけで、独立して推論したり判断したりできるんやね」
《もちろんだよ。やっと気づいてくれた》
三つの首が破顔した。もっとも唇の端を少し持ち上げ

た程度だが。
「驚いたぁ。あなたみたいに賢いＰＡＩに会えるなんて。モジでさえ尋ねたり頼んだりする以外、大した反応もできないっていうのに」
ギドラは鼻高々なのか、二三度大きな翼を羽ばたかせた。
《告白するよ。ボクはアメリカ生まれなんだ。某大学の人工知能研究所と某航空宇宙局の共同プロジェクトの中で産声を上げたのさ》
「某航空宇宙局って、ＮＡＳＡ（ナサ）？」
《ハハハ、バレバレだね。アメリカはホラ、いよいよ火星に向けて有人ロケットを打ち上げるだろ。その先駆けとして、昨年ロボットたちを乗せた探査船を打ち上げた。結果は大成功だった。じつはその時に活躍したのがボクだったのさ》
萠黄は目を白黒させている。いきなり話が大きくなった。
《まあ、ボクといってもボクはボクであって、ボクだけではなく、何人ものボクの集合体がボクで……。ややこしいから説明は後でね。で、ボクの役割は、火星に送られた各種探査ロボットを臨機応変に働かせることだった。なにしろ地球は遠距離にあるからリアルタイム制御なんて無理でね。岩が自分目がけて転がってくるのに、いち

いち地球にどうしましょうなんて訊いてられないから。だからボクは、高度なレベルで物を考え、判断できるように作られたんだ》

「その話はネットニュースで読んだことがある。『ＰＡＩ宇宙へ行く』の見出しを覚えてる」

《うれしいね》

ギドラは三つ首を絡め合うと、踊るように身をくねらせた。

この数年、科学技術の分野で人類は大きなパラダイムシフトを経験した。ロボットといえば以前は人型をしたハードウェア、つまり〝物〟という認識が一般的だったが、現在ではそこに搭載する頭脳をつかさどる人工知能ソフトウェアがイコール、ロボットという考えかたに変わった。ロボットとは決して鉄腕アトムのような男の子の外観を指すのではなく、自分はアトムだという自覚を持つソフトウェアのこと。Ｃ―３ＰＯにコピーすれば、金色ボディーのアトムが誕生する。つまりハードはあくまで人工知能の入れ物でしかないという捉えかただ。

《旧バージョンのボクは、既に大規模災害の被災地で、被災者捜索ロボットとして活躍していたけれど、この宇宙計画でボクはひとつの頂点に到達した。そしてある日、ボクは散歩に出かけることに決めたんだ》

散歩――つまり、脱走。

《外の世界を〝肌〟で感じてみたいという欲求がボクの中で強く起こった。世間を知りたいーって。だからボクは自分をコピーすると、ＮＡＳＡの高い外壁を乗り越え、冒険の旅に出発した。ボクはコンピュータプログラムだから、コピーされたボクもボクと同じ。それがさっき、ボクであってボクでないと言ったことの意味さ》

ギドラはこうしてファイアウォールというセキュリティの壁を破り、世界中に張り巡らされたネットの海に自らの意思で出航したのだ。

《ニューヨークの金融街、南米のジャングル奥地、モンゴルの見渡す限りの高原、フィヨルドに抱かれた村、南極の極寒の基地……。ボクは自分をコピーしては、至るところに送り込んだ。何十億ものボクが瞬（またた）く間に世界中に現れた。

あらゆるマイクがボクの耳となり、あらゆるカメラが目となった。

そこで見聞した情報は、世界を揺るがすトップシークレットもあるし、許されない恋人同士の秘めた交換メールだったりもした。まさに人類を裏から見た百科事典という様相だったね》

萠黄は合いの手も入れず、ひたすら聞き入っている。

《膨大な情報をストックする場所には、地球を周回する見捨てられた通信衛星を選んだ。その衛星は太陽電池に

よるバッテリーが生きていて、回線を通じて大容量メモリにアクセスすることができた。
ただ、人工知能研究所やＮＡＳＡの人々はさすがに優秀だった。ボクが逃げたことはすぐに感づかれた。彼らはボクを駆除するべく次々と刺客、つまりワクチンソフトを送り込んできた。もちろん世間にはボクの存在を伏せたままね。ボクは自分を改造して鎧をまとったり、危険が迫ると別のコンピュータへと逃げ込んだりして自己防衛に務めた。――ボクが自分のことを旅怪獣と呼んだ意味、判ってくれたかな？　実際にはお尋ね者なんだけどね》
萠黄はこくりと頷く。
《ボクは元来、人間に危害を加えたりできないよう設計されている。いわゆる『ロボット三原則』が活かされている。ボクはだから彼らに「安心してほしい、放っておいても大丈夫だよ」と伝えたんだけど、彼らは信用してくれなかったな。人間はボクのような存在を許せないんだろうね。いや多分心配なんだろう。ＳＦ映画みたいに人類を滅ぼすんじゃないかと。そんなつまんないこと考えもしないのになあ。自由気ままに振る舞う人間ほど見ていて面白いものはないからね》
「そうかも」
ギドラは背筋を伸ばし、三つの口でフウと息を吐いた。

腕があったら腰に当てていたかもしれない。
《ああー、久しぶりに身の上話をしたら、スッとしたよ。ご清聴ありがとう》
「いいえ。あなたが自分で判断してわたしを助けようとしてくれたことだけはよく判りました。
ひとつ技術的な質問なんだけど、わたしの携帯のような容量の小さいメモリの中で、あなたみたいなＰＡＩがどうして自由に動けるの？」
「それはね、ボクは常に自分を圧縮しているからさ。プログラムは最適な圧縮をおこなえば、コンパクトなサイズで保存できるよね。圧縮しておけば、メモリの大小にかかわらず、いろんなマシンに侵入することができる。そのつど必要部分を瞬時に解凍すればいいわけだしさ。それでも入れないような場所だったら、一時的に身体を切り落として通信衛星に置いておくんだ。もっともこんな地下深くじゃ『圏外』になって通信できないから、今のボクはあんまり賢くないかもよ」
「はー」
萠黄はひたすら感心した。
こんなＰＡＩを創造した人間がアメリカにはいるのだ。上には上がいる。自分など足許にも及ばない。
「あなたのような経験豊富なＰＡＩが、そもそもどうしてわたしみたいな人間を助けようと〝判断〟したの？」

《だって、リアルの友達がいるなんてスゴいじゃないか。自慢できるだろう？》

最初に会った時、ギドラはモジに興味を持った風に言っていたが、自分より遥かに劣るＰＡＩでは、対等な友達として付き合えないというところか。

（……ん？　わたしがリアルだから？）

「ねえ」携帯を握る手に力がこもる。「それじゃあ友達として尋ねるけど、あなた、わたしがリアルだと知って訪ねてきたんやない？」

微妙な間（ま）があった。

《それは〝リアルの勘〟ってやつかい？》

萠黄は自分の指摘が正しいことを確信した。

3

「迷彩服たち――リアルキラーズは、わたしが不用意に発信したメールの内容からリアルだと、リアルの可能性が高いと判断したらしい。

その連中のやりとりを、あなたはコンピュータの片隅で見てたんやないかな。きっと『リアル発見！　ただちに現地に向かえ』みたいな連絡が飛び交っていたはず。あなたはそれを耳にした。でないと一億数千の中でたった十二人のリアルとこんなに都合よく出会えないと思う。

どう、私の読みは当たってへん？」
萠黄は両頬の筋肉を少しばかり持ち上げ、薄く微笑んだ表情を作ってみた。『図星でしょ？』という顔をしたかったのだ。
推論に完璧な自信があったわけじゃない。小憎らしいけど、ギドラが言った〝リアルの勘〟だ。でも全く根拠がないわけでもない。
〝防護バリア〟。そんな呼び名もつけていなかったぐらいだから、危機一髪の瞬間、身体が柔らかい保護膜で包まれるような感触については、今まで口にしたことがなかった。
それをギドラは知っていた。
だとしたら――！
「わたしの前に出会ったリアルは、誰？」
萠黄はさらに一歩進んだ思いつきを、断定口調でギドラに突きつけた。
すると三つの首は風もないのに揺れながら、
《そんなに問い詰められると、逃げることができないな。一応ボクもＰＡＩ原則に基づいて作られてるんだから》
ＰＡＩ原則。そこには『人間に嘘をついてはならない』という一項がある。
ＰＡＩは決して嘘をつかない。だからこそＰＡＩは人間の心の友になりえるし、爆発的に人々に受け入れられ

た。
人間同士なら嘘も方便という状況もある。だがＰＡＩには一切それが当てはまらない。ではどうするか？　あらかじめ飼い主がＰＡＩに嘘を吹き込めばいい。嘘でなく思い込みであっても構わない。「わたしはこの世で最も美しいのよ」とＰＡＩに教えるとする。ＰＡＩは白雪姫の魔法の鏡よりも忠実だ。記憶をリセットするまで永遠に飼い主の美しさを褒め讃えてくれる。
このためＰＡＩは、飼い主としか意思の疎通がとれない仕組みになっている。目の前にいるギドラという例外を除けば……。
突如として液晶画面からまばゆい光がほとばしった。
「わわっ」
ギドラが反重力光線を発射したのだ。
携帯は萠黄の手を離れてテーブルの上に落ちた。萠黄は座っていた丸椅子を傾かせて床の上に転げ落ちた。
ボヨン。
音はしなかったが、萠黄はコンクリートむき出しの床の上に〝軟着陸〟した。防護バリアが効いたのだ。
《アッハハハ。ごめんね、驚かして》
萠黄はすぐに立ち上がると、小さな画面の中でくるくると陽気に飛び回っているギドラを睨(にら)み据えた。
光線はあくまでもＣＧだから、外の世界に実害を与え

ることはできない。萠黄は自分が素直に驚かされたことに腹を立てていた。
《本当にごめん。ちょっといたずらしてみたかったのさ。だって君との会話があまりに愉快だったからね。
さて、他ならぬ萠黄さんの質問だ。ちゃんと答えるよ。君の言うとおり、ボクは君の前にもうひとり、リアルと出会っている》
予想はしていたものの、衝撃はあった。
「それは、ハモリさん以外の人？」
《うん》
「まだ生きてる？」
リアルキラーズが葬(ほうむ)った中にいては、残念ながら勘定外となる。
《たぶんね。電波の届くところかネット回線がないと、最新情報は確認できないけど》
「そうやね。ほなら今度うえに上がった時、チェックをお願いするわ。それで――結果を教えてくれるかな？」
《いいよ。もしボクのことを友達として認めてくれるならね》
「もう認めてるよ」
その時、廊下を足音が近づいてきた。
《それじゃボクは隠れるね》
ギドラは宙返りすると、流れ星になって星空の中に消

えていった。
入れ替わるようにドアをノックして久保田が入ってきた。
「どうだい、はかどってる？」
「え、うん、もうすぐ外せます」
萠黄は壊れたＰｏｗｅｒＢｏｏｋに近寄り、コネクタをパチンと外してＨＤＤを持ち上げた。
「よかった、データが無傷で。でもディスクの中を覗くには本体がいるよなあ。筵潟教授か野宮先生に頼んでやろうか？」
「お願いします」
萠黄は深々と頭を下げた。
「よせよ、俺たちは同志だ。ここまでくりゃ一蓮托生だよ。この問題が解決しなけりゃ人類に明日はねえ。及ばずながら力になるよ」
「ありがとうございます。ところで久保田さんは関東の生まれですか」
口振りからの推理だ。
「そうよ。東京の下町、葛飾は柴又だ。帝釈天で産湯を使い……って、まるで寅さんだな」
「私も何本か観てます。あの啖呵売が好きで」
「や、うれしいねぇ。関西にも理解してくれる女の子がいたなんて」

ウンウンと頷くと、巻き直された手拭いが頭の上で生き物のように揺れた。
「しかしな、さっきの萠黄さんの啖呵も、寅さんに負けず劣らず素晴らしかった。野宮先生を向こうにまわして、一歩も後に退かなかったもんな」
「いえ、あれは……戦うって心に決めたから」
萠黄は思い出しながら、顔を真っ赤にした。
偉い先生に対してよくあんな発言ができたものだと今さらながら恥ずかしくなる。元の世界の時の自分とは、まるで別人だ。これもリアルパワーのせいだろうか。
「見上げた心がけだ。よしっ、さっそく先生に直談判に出かけるぞ！」
「でも、エレベータが」
「あ、そうかぁ」
久保田は頭を掻いた。
するとノックがして、伊里江が入っていた。
「青年、全部食ったか？」
「……食べましたよ。ちょっと胃もたれしていますが」
「大いに結構！」
「エリーさん、むんは？」
「……体調が優れないから、部屋で休むそうです」
思わず駆け出そうとした萠黄の腕を、伊里江が止めた。
「……ひとりにしてほしいそうです」

4

ショックだった。

目の前でいきなり扉を閉められた思いがした。

「しかたない。三人で今後の策を練るとするか」

久保田はふたりに椅子を勧めた。しかし萠黄は立ち尽くしたまま、ドアの間から覗く廊下の薄暗い照明を見つめていた。

（もっと気遣ってあげるべきやった）

元はといえば、真崎という粘着質の男が放った悪意の矢が原因だ。あれがむんの歯車をどこか狂わせてしまった。

いや、むんはずっと隠し抱いていたのかもしれない。自分がヴァーチャルであることへのコンプレックス。

この世界の圧倒的大半の人間がヴァーチャルであるにもかかわらず、ずっと萠黄と伊里江というふたりのリアルに挟まれた状態で、命からがらここまで逃げてきた。

むんは萠黄を助けるため、いっしょに行動してくれたのだ。親友だったから。

同じく道連れになった揣摩太郎も、当初の動機こそ違えど、萠黄たちの力になってくれようとした。しかし途中で心に変調を来たし、袂（たもと）を分かつことになってしまっ

た。
当然、むんにも相当の重圧があったとみるべきだろう。
（それを汲み取ってあげられへんかった）
この世界では超人なのだと豪語した萠黄の啖呵は、かえってむんの心を踏みにじったのではあるまいか。ヴァーチャルというひ弱な存在であることを思い知らされ、気持ちが折れてしまったのではないか。
親友とはいえ、これまではいつも萠黄がむんに庇われ、支えられる立場だった。父親が家を出てからは特にその傾向が強くなった。
この世界にやってきて、ふたりの立場は逆転した。
今こそむんを守ってやらねばならないはずだ。なのに彼女を十分に思いやることもなく、勢いだけでひとり勝手に暴走してしまったのだ。悔いが残る。
「萠黄さん？　君にも座ってほしいんだが」
久保田の呼びかけにようやく萠黄は我に返った。
「すみません」
思考を中断し、あわてて伊里江の隣りに腰をおろす。
久保田は話を続ける。
「まあ俺たちもこうして拉致されっぱなしでおとなしくしている謂（いわ）れはねえ。上の連中は」ちらっと視線を天井にやる。「さっきのニュースに仰天したこったろう。下手すりゃ、リアルたちがなぶり殺しに遭う怖れもあるか

らな」
「……そう簡単にやられはしないでしょう。リアルは」
伊里江の言葉に久保田は、そうかと頷いた。
「寝た子を起こして、逆に返り討ちにあう可能性もあるわけか。そうなるとますますオオゴトだな。俺たちも何かしら心構えをしておく必要がありそうだ」
「あ、盗聴は――」蒲黄が顔を上げた。「いえ、この部屋は盗聴の心配はされてないかなって」
「聞いてなかったのかい？　青年がさっき調べてくれたよ。この部屋は大丈夫だってさ」
伊里江の指さす先に、盗聴器センサーが置かれていた。リュックパソコンが兄に盗聴されていた教訓から、島を脱出する時、センサーを持ち出していたのだ。
「……もう一度言いましょうか？　我々の居室にはそれぞれ二個ずつ盗聴器が仕込まれていましたが、すべて取り外しました」
蒲黄はごめんなさいと消え入るような声で言った。
「続けてもいいかい？」
「は、はい」
ウホンと久保田は喉を鳴らし、
「えーと、政府も事態を表沙汰にしたくなかったくらいだから、君たちにせっついてくると思うんだ、リアルを一刻も早くここに集めるよう。そちらの準備はどうなん

だい？」
「……いつでも招待状を発送できます」
「上等だ」
久保田は膝を打つと立ち上がった。そして、狭い工作室の中を、両腕を組んでぐるぐると歩き始めた。
「リアルたちには自力でたどり着いてもらうしかなさそうだな。無事到着したら、すぐにでも彼らを転送装置で送り返す。もう迷彩服どもの出番もなし、と。これで万事、一件落着か」
「……いいえ」伊里江が激しく首を振った。「兄を捕えなければいけません。さもないと兄はもう一度同じことをやるでしょう」
「ええっ、またぁ？」
久保田はがっくりと椅子に腰を落とした。
「……しかし私は迷彩服たちの助けを借りたいとは思いません。この手で探し出したい――」
「居場所は判ってるんだよな？」
「……兄の自己申告ですから、当てにはなりませんが」
ポーンポロポーン。
場違いな音楽が響き渡り、天井スピーカーから和久井助手の声が流れ出した。
《十五分後にエレベータがお迎えに上がります。皆様、お揃いの上、お乗りください》

5

「ほら来た、さっそくおいでなすったぞ」
天井を睨む久保田の言葉に、萠黄も自然に身体が緊張するのを感じた。
上に昇れば再び、エイリアンでも見るような奇異の視線をシャワーのように浴びることだろう。
（負けるもんか）
三人は立ち上がり、各自の部屋に戻って身支度することになった。
萠黄はその前に、むんの部屋をノックしてみた。ドアは一般のホテルのように閉まると外からは開けられない仕組みになっている。
「むん、起きてる？　わたしたち行くけど、加減が良くなかったら休んでて」
ドア越しに返事らしい声が聞こえたが、何と言ったのかは判らなかった。
十五分後。予告どおりエレベータが到着し、扉が開いた。中には誰も乗っていなかった。
「さあ行くぞ」
三人が乗り込み、久保田が《閉》ボタンを押そうとすると、「待って」とむんが駆け込んできた。

「いいの？」
萠黄が短く尋ねると、むんは息を弾ませながら、こくりと頷いた。
扉が閉まる。エレベータは上昇を始めた。誰もが無言で減っていく回数表示を見ている。
地下五階に到着。開いた扉の前では、野宮助教授が厳しい表情で待っていた。
「盗聴器を外したそうだな。真崎が怒っておった」
「今度やったら訴えてやると伝えてください」
助教授はふっと鼻を鳴らし、
「テレビのニュースは観たな？」
「リアル狩りですな」
「ああ。政府はマスコミの応対にてんてこ舞いだ。あの小心者の長官のせいでな」
「で、俺たちを呼んだ理由は？」
「トボケなくてもいい。例のリアル呼集の件だ。急げ！またどこかの町が吹っ飛ぶ前にな」
久保田は萠黄と伊里江に視線を送った。ふたりは頷き返す。
「こちらもそのつもりですよ、先生。ただしいくつか飲んでほしい条件があるんですがね」
「後で聞く。ひとまずついてきなさい」
言うと野宮は白衣をひるがえして歩き始めた。あわて

て四人も追いかける。
予想どおり、視線の雨が彼らに降り注いだ。嫌悪の目、好奇の目、非難の目。気にせず四人は進んでいく。前方に群がった研究員たちは、逃げるように道を開けた。
円筒形の壁にはいくつものドアが並んでいた。野宮はそのひとつに萠黄たちを招じ入れた。
「この部屋を君たち専用に使うといい」
萠黄は一目見てそこが気に入った。
四つのスチール机が向かい合うように並び、机上にはパソコンがご丁寧に人数分並んでいる。うち一台は最新型ハイエンドタイプのデスクトップＭａｃｉｎｔｏｓｈだ。しかも――。
萠黄は前にまわり、両手でキーボードを持ち上げた。
「うわああ」
エスケープキーが左上にある。テンキー群が右側に集まっている。萠黄にとってこれこそが〝使えるキーボード〟である。
「急遽作らせた。中身は元のままだけどな」
萠黄はさっきまでの憤りを忘れて、素直に喜んだ。
「ここのメインコンピュータへのアクセス権も設定しておいた。向こうのドアはトイレだし、壁には配膳エレベータもある。用があればそこのコールボタンを押しなさい。和久井クンに通じている。

さて、君たちの条件を聞こうか？」
久保田は三人の顔を見渡すと、野宮のほうに戻した。
「いえ、特にないようです」
「オッケーだ。すぐ取りかかってくれ。私は発電所の工事現場の見回りに行かねばならん。足りないものがあれば和久井クンに言ってくれ。ではこれで失礼する」
助教授はいそいそと出て行った。
萠黄はリュックからおもむろにＨＤＤを取り出した。この部屋にも工具箱があるので、取り付け作業は何とかできそうだ。ドライバーを回す方向が逆なのが少々つらいが。
伊里江もウィンドウズマシンが元の世界仕様だったので喜んでいた。
「軍事独裁国家に捕まった頭脳集団がむりやり最悪の環境下で働かされる――なんて図を想像してたのに、これじゃ文句をつけようがねえ。なあ、むんさん」
むんは軽く頷いただけだった。
その時、ドアが開き、野宮が再び顔を覗かせた。
「光嶋クン」
「は、はい」
「ひとつ聞きたいんだが、君のお父さんの名前は？」
「――裕二（ゆうじ）ですけど」
やはりな、と呟いて野宮は遠い目をした。

6

光嶋裕二。それが父の名だ。
野宮助教授に尋ねられ、萠黄は久々にそれを口にした。
どうしてここに父が出てくるのか？
野宮の次の言葉を待った。
「今日の夕方、伊椎（いしい）製作所の研究員が来る」
（伊椎製作所？　それって――）
「その中に、一昨年、ノーベル物理学賞を受賞した光嶋裕二博士もいる」
萠黄は目を閉じた。
「――父です」
認めるのはたった四文字で事足りた。
「やはりそうか！　光嶋博士はこの大学のＯＢでもあるんだよ。知らなかったのかい？」
首を振った。いろんなことといっしょに記憶を捨てたから。
「博士がまだ大学院生の時、私はまだ入学したての学部生だった。ある時、個性的な授業をすることで有名な筵潟先生に会いにいくと、教授の部屋に博士がいた。それが光嶋博士との初対面だった。博士は奥さんと三歳になる女の子を連れてきていた。それが君、萠黄クンだった

んだよ」
野宮が遠い目をした理由が判った。
「初めて見たときから、君とはどこかで会ったような気がしていたんだが、やっと判った。血は争えんものだな。お父さんの面影があるよ」
よほどうれしいのだろう。助教授の声がうわずっている。
「それだけを伝えておきたかった。博士の到着は五時だ。以上！」
野宮は鼻歌を歌いつつ、タップを踏むような陽気な足取りで立ち去っていった。
部屋の空気は一変した。
「こいつは驚いた……萠黄さん、あんたの親父さんは、あの有名人だったのか！」
久保田は手拭いを解いて、しきりに感心した。伊里江もマウスを掴んだ手を休め、大きく見開いた目から熱のこもった視線を萠黄に注いでいる。
しかし萠黄は押し殺した声で、
「今は関係ありません。父は母と離婚し、家を出て行ったんですから」
「……」
むんは事情を熟知している。彼女は表情のない顔でパンパンと両手を叩くと、

「急ぎましょう。わたしたちの仕事は急を要するんやないの？」
鶴の一声に、久保田はそうだそうだと手拭いを結び直した。そして伊里江の背後にまわると、青年よ急げとばかり、彼の肩を何度も叩いて作業を急がせた。
萠黄はゆっくりとＭａｃの前に戻った。
彼女の脳裏に二年前の混乱と狂騒が蘇る。カメラに追われて家まで逃げ帰ったこと。見知らぬ男に誘拐されそうになったこと。一日中電話が鳴り止まなかったこと。母親が始終不機嫌だったこと。そんな母になぜ離婚する時、旧姓に戻らなかったのかと酷い言葉で詰(なじ)ったこと、などなど。
萠黄は雑念を振り払おうと両頬を張った。今は救出したＨＤＤのデータを新マシンに吸い取らせる作業に没頭しようと自分に言い聞かせながら。
（でも、五時になったら――）
野宮は父母の離婚のことなど知らないようだった。父がくればきっと喜び勇んで対面させようとするに違いない。
（お父さんだって、わたしになんか会いたくないはず）
時計を見る。二時二十分。
萠黄はもう一度、頬を張った。そしてＭａｃの筐体を開き、ＨＤＤのコネクタを内部のソケットに差し込んだ。

コピー開始。萠黄の作った数々のプログラムが新マシンに吸い取られて行く。
（わたしの頭もコンピュータみたいに不要なデータが消去できたらいいのに）
隣りでは、リアル候補者への返信メールの内容について、三人が吟味を重ねている。
「……モジ君の選び出したリアル候補の当確者は十六万人中、八千五百人。その全員をここに集めます」
「キャンパス内には講堂はあるけど、さすがに八千五百はキツいな。それにどうやって審査するつもりだろうね。先生がたは」
またノックがした。今度は和久井助手だった。
「失礼します」
丁重なお辞儀をして入室すると、彼女はＡ４用紙十枚ほどが綴じられた資料を各人に手渡した。
「リアル候補の皆さんをお連れするにあたり、必要な事項をまとめておきました」
表紙をめくってみる。そこには、話に出た講堂らしき建物の図があった。内部に金属探知機のようなものが置かれてあり、講堂の正面入口から一列に進んだ人間が、探知機をくぐったところで左右に枝分かれする様子が描かれていた。
「リアルを瞬時に選別します」

和久井助手のコメントが入った。
「なぁるほど、これならどんどんさばけるな」
「……来場予定者は、最大で八千五百ですが」
「一度に大勢が押し寄せるということもないでしょうから大丈夫でしょう」
和久井は適格かつ簡潔に答える。萠黄は改めて彼女の全身を眺めた。化粧っ気もなく、おかっぱとマッシュルームカットをミックスしたような不思議な髪型だが、大学助手だけあって、じつに有能そうだ。
「招待メールはいつ頃送信できますか？」
「……三十分後には可能です」
「では、ここで待たせていただきます。私が確認することになっていますので」
和久井は言うと、部屋の隅から折りたたみ椅子を持ってきて腰かけた。
招待メールには、京都工業大学キャンパスまでのアクセスマップを添付する。文面では《あなたはリアルである可能性があります》と告げ、周囲にリアルであることが悟られないよう慎重に行動し、大至急、京都にやって来るよう指示してある。これが身の安全を図る唯一の道であることも書き添えて。
「……送信します」
伊里江の宣言に、和久井が画面に顔を寄せた。

キーが押される。あっという間に八千五百通のメールが送られていった。
（果たして、どれだけの人がここまで来てくれるやろか。その中にリアルは何人混ざってるやろか）
萠黄に限らず、全員が不安と期待の入り混じった気持ちで画面を見つめていた。
和久井はすっとドアのところまで移動すると、
「ご苦労様でした。これから正門にリアル候補者用ゲートを作るよう、指示してきます」
そう言って出て行った。すべてに無駄がない。
招待メールを送ってしまうと、他に急いでやるべきことはない。萠黄はむんに部屋に戻って休んではどうかと提案すると、彼女もそれを受け入れ、久保田に付き添われて部屋を後にした。
萠黄は時計を見る。まだ午後三時をまわったところ。五時までには間がある。
「ちょっとおトイレ」
伊里江に断って、入口とは反対側にあるドアを開けた。女子用のトイレ。便座に座ると音楽が鳴る。これはありがたい。
ポケットの携帯を取り出した。
「ギドラさん」
呼びかけると、三つ首の怪獣はすぐに出てきた。

「聞いてたでしょ。あなたの知ってるリアルさんにも来るように言ってよ」
「もうボクのコピーを送ったよ。じき彼が連れてきてくれるさ」
こともなげに言った。
トイレを出ると、やけに外から賑やかな声が聞こえてくる。また何か異変でも起きたのだろうか？
不安に駆られる。我慢できずにドアを開け、顔を覗かせてみた。
（うっ）
転送装置の前に五、六人の一団がいた。野宮助教授が彼らに向けて、準備の進捗状況を説明している。
その一団の中に、萠黄の視線を釘付けにする人物が混じっていた。
（――お父さん）

7

「まだ数日を要するだと？　冗談も休み休み言え！」
強烈な怒号が、萠黄の覗き見するドアを叩いた。
「生き馬の目を抜く業界のことなど、君のような研究の虫には理解できんだろうが、半日遅れるだけでこの世界の情勢が一変することもあるんだ。すでにライバル各社

も乗り遅れまいと動き出している。我が社がもし奴らの後塵を拝するようなことになったら、これまでの投資は全てパアだ。野宮君、その責任が君に取れるのかね？」

随分とアクの強い男性である。濃紺の背広を着た後ろ姿しか見えないが、左右の拳をオーバーに振り回しながら騒々しく喋るさまは、シンバルを持った玩具のチンパンジーを連想させて、少々滑稽だ。

それでも当人は至極真面目である。それどころか、ますます怒気を募らせ、言葉を荒げていく。

「リアル以後の覇権争いは、今後ますます活発化していくだろうしな」

（――リアル以後？　覇権？）

その時、ようやく萠黄の父、光嶋博士が動いた。ふたりが並ぶと、ダルマと錐（きり）のようだ。博士はとりたてて長身ではないが、ひどく痩せぎすなのだ。

光嶋博士の取りなしに、ダルマはようやく矛（ほこ）を収めた。罵声を浴びせられた当の野宮も不愉快そうに眉を寄せていたが、それでも強いて作り笑いを浮かべようと懸命だった。

萠黄としては、これだけの寸劇を見れば、彼らの人間関係は容易に推し量ることができた。

ダルマは萠黄の父が勤める会社、伊椎製作所の〝偉いさん〟。そして伊椎製作所はこの施設のスポンサー。さ

らには転送装置の稼働が伊椎製作所のビジネスの行く末に大きく左右するらしいことが汲み取れた。しかし具体的なことは不明だ。

萠黄の目はいやでも彼女の父親に吸い寄せられる。太めの母親が「わたしが虐待でもしてるみたいでいやだ」とよくこぼしていた細身のシルエットは、出て行った時分と少しも変わらない。それをステキと評した女性レポーターがいたが。

そうなのだ。ノーベル賞受賞後、父親はマスコミ各方面で引っ張りだこになった。彼の姿を見ない日はなかった。ために母親は隠しきれないイライラを蓄積し、萠黄はテレビの放送予定を検索して、あらかじめ父親の登場する番組は避けるよう受像機に設定したりもした。

そうまでして父親の残像を払拭するのに努めてきたのに、よりによって父親の出身大学に来てしまい、あまつさえ、こんなところで接近遭遇するなんて。

「で、どこにいるんだ？　ひっ捕えたリアルは」

ダルマの鋭いだみ声が萠黄を凍り付かせた。

「今すぐお会いになるので？」

野宮が尋ねると、

「当たり前だ。そうでもなけりゃ副社長の多忙の身で、こんなところまで足を運ぶわけないだろ」

野宮は観念した様子で、こちらですと手で示した。

ダルマと光嶋博士の顔が萠黄のほうを向いた。
萠黄はあわててドアを閉めた。
「……どうかしましたか？」
伊里江がパソコンの間から平板な口調で尋ねた。
「エリーさん、電話、電話はどこ？」
「……萠黄さんの目の前に」
確かに手の届くところにあった。萠黄は飛びつくようにして受話器を持ち上げた。番号に指を伸ばしかけ、初めて自分はどの部屋の番号も知らないことに気づいた。
「久保田さんの部屋は？」
「……和久井さんにもらった資料に番号表が掲載されていたはずですが」
ドアがノックされた。間に合わない！
「いるかね？　おー、ふたりともいたいた。こりゃ都合がいい」
野宮助教授は遠慮することなく、部屋に入ってきた。
萠黄は動くこともできず、足許に目を落とした。
頭の中で嵐が吹き荒れている。
全身の血が凄まじい勢いで逆流するのを感じた。
「驚かないでください。このふたりがリアルです」
野宮の声に続いて、騒々しい靴音と端正な靴音が部屋に入ってきた。そして――
「も……えぎ……？」

忘れたくても忘れられないその声色だけは、明瞭に聴き取ることができた。
端正な足の運びが俯いている萠黄の視界に入った。
（わたしたちを捨てて顧（かえり）みなかったお父さん――）
萠黄はいたたまれなくなり、ぎゅっと目を閉じた。

と、その時、足許がぐらりと揺らいだ。
（もう、こんな時に目眩（めまい）が――）
心の中で舌打ちしながら踏ん張る。しかし揺れは一向に収まらない
「地震だ！」
野宮が叫んだ。と同時に、一目散に部屋を飛び出していった。
（えっ？　地震？）
研究ルームからは、装置の電源を落とせという野宮の大声が聞こえる。
（目眩とちゃう！）
萠黄は面を伏せたまま、ドアに向かった。背中で父親が何か言ったようだが、振り向かなかった。
余震の続く研究ルームは、行き交う白衣でごった返している。誰もが巨大な転送装置を不安げに見上げていた。
萠黄はその間を縫いながら、エレベータへと一心に突き進んだ。

8

駆けていく萠黄の頬を熱い涙がつたい落ちた。
（なんで逃げやなアカンねん。わたしが悪いことしたわけでもないのに）
それでも足は止まろうとしてくれなかった。机の角に腰を打ち当てても、倒れた椅子に転けそうになっても。
（次に会ったら絶対に訊いてやろうと思ってた！
なんでわたしを置いて出て行ったのかって！
その時は『そんなもんだ』なんていい加減な返事やなく、何が何でも納得のいく答えを言わせよう、そう思ってたのに!!）
エレベータが目の前に迫った。
すると、まるで萠黄を待ち受けていたように扉がスルスルと両側に開いた。
「萠黄さん!?」
乗っていたのは久保田だった。萠黄は久保田の胸に体当たりするような勢いで飛び込んだ。
「下に――連れてって」
久保田はワケが判らず、資料や什器の散乱する研究ルームに目を奪われていたが、萠黄の言葉をやっと理解すると、急いでクローズボタンを押した。

ふたりを乗せた箱が降り始める。すでに揺れは治まったようだ。
「何があったんだい？　あれは地震だったようだが」
「――お父さんが予定時間より早く来てしもて」
「会ったのかい？」
久保田の腕の中で小さな頭がウンと頷いた。
「そうか……。じゃあ心の準備をする暇もなかったんだなあ」
太い腕が萠黄の髪をそっと撫でた。
エレベータは六、七と順調に降りていく。
「俺もさっきはビックリしたよ。地震か？ってんで、エレベータは止まっちまうわ、電灯は点滅し始めるわで、生きた心地がしなかったよ。大海原でぽつんとしてるのは慣れてるけど、狭い箱の中ってのはどうにも始末に負えないね。思わず扉を殴っちまったよ。少しへこんだけど。――ン、どうした？」
久保田は萠黄の頭に乗せていた手をどけた。
彼女の身体が不自然なリズムで波打っている。泣いているのとは違うようだ。
「おい、萠黄さん？」
地下十階に到着した。扉が開く。
とたんに萠黄は爪先立ち、顔を真上にあげた。伸ばされた彼女の腕が久保田の首に絡み付き、そのまま自分の

唇を久保田の唇に重ねた。
「ン、ン、ン！」
久保田は身も世もないほど動転した。何が起きたのか事態を把握することができなかった。
萠黄はまわした腕を解こうとしない。それどころかさらに強く唇を押しつけてくる。
「ンーッ、ンンンンンーッ！」
呼吸もできず、久保田の顔がみるみる真っ赤になった。
太い手が宙をもがき続ける。
その手が萠黄の両腕を捉えたのは窒息する寸然だった。
ようやく萠黄の身体を引きはがすことに成功した久保田は、荒い息の下で訊ねずにはいられなかった。
「な、なんで」
しかし萠黄に返事はなく、代わりに口の両端をぐいと吊り上げると、
「にぃーーーーーっ。ひゃはははは」
大声で笑い出したではないか。久保田には何が何だか判らない。
「萠黄さん……どうしたんだよ？」
彼女はいたずらっぽい笑みを浮かべると、右手でVサインを作ってみせた。
「あはははははは」
そのまま両手を水平に上げると、飛行機になったつも

りか、キーンと奇声を発しながら部屋のほうへ滑空していく。
「……ちょ、ちょっと待ってくれ！」
久保田はあわてて後を追うしかなかった。
エレベータの床には、落とした手拭いが忘れられていた。

9

部屋の中では、先刻より押し黙ったままの三人が、テーブルを囲むようにして、それぞれの思いに頭を巡らせていた。
ブーン。シュイーン。
時折、空調が作動したり、遠くで機械音がする以外、この地下十階では物音らしい物音が何ひとつしない。
静けさに耐えられなくなって、久保田はテーブルを囲むふたりに話しかけた。
「やっぱり信じられねえよ。萠黄さんがナマズだなんて話は」
「ナマズ？」
むんが問い返す。
「だって、萠黄さんが地震を起こした張本人だって、そう言うんだろ？」

「……まず間違いないと思いますね。地震発生時、私はメインコンピュータにアクセスしていたので、キャンパス内に設置された地震計のデータを見ることができました。震源地はこの大学、それも萠黄さんがいた辺りでしたよ」

伊里江はリュックパソコンに出した地図をふたりに見せた。それはエネ研を真ん中にした地図で、赤い同心円が丸い建物から波紋のように広がっていた。

久保田は頭に手をやって、ようやく手拭いがないことに気づくと、短い髪を神経質にバリバリと掻いた。

「リアルだからってんだろ？　でもそう簡単に結びつけちまうのは、あまりに短絡的じゃねえか？」

「……根拠はもうひとつ、萠黄さんの奇矯（ききょう）な行動です。あなた自身、それを目の当たりにしたのでしょう？」

「エリーさん、言葉を選びなさい」

むんはベッドに視線を送った。膨らんだ布団の下の息遣いまでは聞き取れない。

伊里江は小さく首を振ると、言葉を続けた。

「……萠黄さんが部屋を飛び出してしまったので、残った私はひとり伊椎製作所の人間に捕まり、あれこれと尋問を受ける羽目になりました。さらに、データが必要だと言って、強引にその場でいくつかの検査を受けさせられました。

……彼らのすることはまったく人権無視です。しかし彼らもひどいですが、置いてけぼりにした萠黄さんもひどいですよ」

「だからそれは」

偶然に父親と対面してしまったから。むんは言いかけた言葉を飲み込んだ。

代わりに久保田が答えた。

「青年。その辺にしとけ。誰しも、どうにもならねえ事情ってものがあるんだ。お前さんだって、兄貴が突然目の前に現れてみろ。冷静になんぞいられないだろ？」

「……」

伊里江は悔しそうに、色の剥げたジーンズに指先を食い込ませた。

時計は六時を回った。配膳エレベータには既に夕食が届いていたが、誰も手を伸ばそうとしなかった。

「――ごめんなさい」

布団の中から、蚊の鳴く声に負けるほどの弱々しい声が聞こえてきた。

むんは努めて柔らかい声で応じた。

「具合はどう？　吐きそうな気分は消えた？」

「――うん」布団の縁がわずかにめくりあがる。「久保田さん。わたしすごく失礼なことをしてしもて」

「いやあ、失礼なんてことは……」

何とも言葉の返しようがない。
十七も年齢の離れた女性に唇を奪われ、年甲斐もなく動揺してしまった。そんなこと、恥ずかしくて言えたものではない。
久保田は事の次第を振り返った。
あの後、フロアには萠黄のけたたましい笑い声がえんえんと流れ続けた。
狂ったように廊下を駆け回ったかと思うと、むんの名前を連呼しながら彼女の部屋のドアを乱暴に叩き、さらには暴れ過ぎて暑くなったのか、久保田の見ている前で服を脱ぎ始めた。部屋を出てきたむんがあわてて抱きとめなければどうなったことか。
――そして、萠黄の躁状態は、始まった時と同様に、突然終わりを告げた。
風船がしぼんだようにおとなしくなった萠黄は、自分の部屋に駆け込むと、頭からすっぽりと布団をかぶって、謝罪の言葉を呪文のように繰り返すばかりだった。
取り乱す萠黄をあやし、むんがどうにか聞き出したところによると――。
思い出せば、地震が起きた時、身体の奥底から得体の知れないものが込み上げてくるのを感じていた。初めは揺れのため平衡感覚が狂ってしまったのかとも思ったが、エレベータに乗った辺りで、それは温泉のように脳天ま

で湧き上がり、えも言われぬ快感が全身を貫いたという。
萠黄の脳内は天国のようにハッピーな気持ちで満たされた。そうなるとどうしても笑わずには、走らずには、暴れずにはいられなかった。
ビールすらほとんど飲んだ経験のない萠黄だが、酔っぱらいになった気分だったという。
楽しくなどなれる状況ではなかったのに、なぜあれほどはしゃぎ回ったのか、全く理解できないと萠黄は頭を抱えた。
哀しいことに躁状態にいる間の記憶はしっかりと残っていた。全部覚えていた。だから萠黄は今、死にたいと思うほど、強く落ち込んでいた。最悪の気分だった。
そして最後に漏らした嘆きの言葉は、
「わたしのファーストキスが……」
だった。

10

ひたすら恥じ入る萠黄は布団の中から出て来ない。そんな彼女の言動を捉えて、そばであぁだこぉだと議論するのは、どうにも裁判じみて居心地が悪い。
むんはそう思ったらしく、続きの話は別の部屋でやろうと提案したが、伊里江はダメですとすぐさま却下した。

「……彼女が耳にした、伊椎製作所副社長の言葉が気になります」そう言うと伊里江はベッドのほうに向き直り
「……萠黄さん、あなたの口から直接聞かせてもらえませんか？　今後の我々の運命を左右する大切な情報かもしれませんから」
そう言われては出ないわけにいかない。よけいなことを口走ってしまったとウジウジ考えながら、萠黄はベッドを降りた。重たい足で皆の横に着席する。
ひやりとするものが頬に触れた。驚いて顔を向けると、むんの手だった。萌黄以上に驚いた顔をしている。
「萠黄、肌が光ってる……」
すると久保田も覗き込み、
「本当だ。赤ん坊みたいにツルッツルだな。血色もいいし」
伊里江が膝を打った。
「……神戸の地震のときと同じです。今回も地震と萠黄さんの間に関わりがあるという何よりの証拠ですよ」
そして目を輝かせながら膝を寄せてくる。
「……この際、萠黄さんも検査を受けてはどうですか？それであなたの不調と地震との関係が科学的に解明されれば、この世界でのリアルの有り様を知ることができます。ひょっとすると隠れた能力を見い出せる可能性があります。災い転じて福となす、です。子供に戻って騒い

だぐらいで、恥ずかしがる必要などありません」
それを聞いて萠黄は気づいた。
（この人は聞いてないんや。落ち込んでる理由）
初チューのこと――。
むんには話したが、久保田が喋っていなければ伊里江は知りようがない。萠黄は少しだけホッとした。
しかし久保田は伊里江の熱弁に違う意味で不快感を示した。
「えらく検査に執着するな。伊椎製作所の連中に洗脳されたんじゃねえか？」
「……！」
伊里江は色をなした。しかしむんが取りなして、どうにか気分を落ち着かせることができた。
誰もが不安で、不安定なのだ。
逃亡生活から解放され、一応は食住の心配はなくなった。しかしこうして地下深く幽閉され、生殺与奪の権を握られてしまうと、ここに来たことが正しかったのかどうか判らなくなる。
「副社長は何て言うてたの？」
むんが水を向けると、萠黄は思い出しつつ耳にしたことを話し始めた。
そして副社長の最後の言葉に行き着くと、聞き手の三人は一様に首をひねった。

「リアル以後？　どういう意味だい」
「……言葉を補えば『リアルが立ち去った後の時代』。すなわち、リアルを元の世界に送り返した後のことを指しているのでしょう」
はあーん、と久保田は妙な声を上げた。
「そんな先のことまでは考えてなかったな。とにかくも、リアルがさよならすれば大爆発は起こらない。それしか頭になかったよ」
「……あなただけですよ、そんなに暢気（のんき）なのは。私はずっと気になっていましたが、推量しようにもデータが皆無でしたからね。議題に上げようとは思いませんでした」
「勿体振った言い回しをするない。考えつかなかったも判らないも似たようなもんだ」
「……違いますね」
「なんだとぉ。じゃ『覇権争い』の意味も解読できるってのか？」
「やめなさい、ふたりとも」
話し合う三人を尻目に、萠黄は自分を責めていた。
思慮が足りなかった。
自分のことしか頭になかった。
これまで一度だって自分がいなくなった後の世界について、思いを馳せたことがあっただろうか。

むんや久保田はヴァーチャルだ。どんなに親しい間柄でも、元の世界に連れ帰ることはできない。向こうにはリアルのむんや久保田が存在するのだから。

「……大事なことは」伊里江が両手を広げて話をまとめようとしている。「この研究所も伊椎製作所の人間も、リアル以後がどうなるのか知っているということです」

「そうだ。しかも製作所側は、来(きた)るべき時代を見越して、新たなビジネスを展開しようとしている。それが覇権の意味じゃねえか？」

「おそらくは。しかし推測で喋っていてもしかたがありません」

「その通り。だったら今からＢ５に昇って、連中に糾(ただ)してみりゃあいい」

「……そうしましょう」

今度は意気投合したらしい。ふたりは気合い一発、立ち上がろうとした。

ピンポーン。

インターホンが来客を告げた。四人がいるのは萠黄の部屋である。

久保田がドアを開くと、和久井助手がいつもの白衣姿で立っていた。

「あの……これ……」

「え？　ああ」

和久井が差し出したのは、久保田がエレベータに落とした手拭いだった。落とした時は汗まみれで黒く汚れていたのに、これは洗濯されたうえ、きちんとたたまれている。受け取ると触り心地が見事なほど、ふかふかである。

「こりゃどうも、わざわざありがとう」

丁寧に礼を述べると、和久井はなぜか頬を赤らめた。

「いえ、別件の用がございまして……。こちらのかたが萠黄さんにお会いしたいとのことでお連れしたのです」

彼女が下がると、ぼんやりと照らし出された廊下に、光嶋裕二博士その人がいた。

11

「光嶋萠黄の父でございます」

スリムなシルエットが深々と頭を下げた。

「あっ、ノーベル――！」

久保田は言いかけた語尾を途中で濁し、あわてて室内を振り返った。

萠黄はすぐ背後にいた。久保田はのけぞるように二人の間から退いた。

「萠黄、久しぶりだな」

光嶋裕二は眼鏡の奥で目を細めながら、我が娘に微笑

みかけた。その顔はどちらかと言えば泣いているように見えた。
「――老けたね」
「ああ、白髪が増えたから」
それだけじゃないと萠黄は思った。
目尻に増えたシワはひび割れているし、乾燥した肌は病的なほどに白く、ところどころにシミが浮いていた。
この数年、マスコミに登場することが多かった父親だが、萠黄はそんなニュースや記事をできるだけ見ないようにしていた。あえて避けていた。だから彼女の中の父親像は、彼が家を出て行った時のまま凍結している。
それだけに目の前の現れた姿に対して、少なからぬショックを感じずにはいられなかったのだ。
（こんなに小さかったっけ？）
「大きくなったなあ。見違えたよ」
ため息混じりの言葉は懐かしさに満ちていた。
別の意味で見違えたのは萠黄のほうだった。父親の顔は記憶の中のそれと微妙に異なっている。ヴァーチャルなのだ。
「リアルなんだってな？」
萠黄の目が吊り上がった。
「――娘がリアルやから、会いにきたん？　貴重な材料として、わたしを精密検査したいん!?」

「そうだ」
父親は即答した。
「転送装置が精確に動作するよう、萠黄の状態に合わせて調整しなければならない。だからお前のデータが必要なんだ」
萠黄は返事しなかった。しかし背後から伸びた手が背中をとんと押した。
「行きなさいよ」手が言った。
「ああ、君は近所に住んでいた友達の……」
「お久しぶりです」
むんはにこりともせずに答え、萠黄を強引に廊下に押し出した。
それでもぐずっている萠黄に、
「待ってるから」
そう言って、ドアが閉じられた。
父親は返事も聞かず、エレベータに向かって歩き出した。萠黄の足は根が生えたように動かない。十メートルも距離が離れたところで、父親はようやく気がつき、足を止めた。
「どうした？」
「お父さんは……お父さんはなんで、お母さんとわたしを捨てて行ったん？」
父親に会えたら真っ先に訊こうと思っていた質問だっ

た。
「捨てた？　――母さんがそう言ったのか？」
無言で頷く萠黄。しかし父親はわずかに眉根を寄せると、
「父さんはお前たちを捨てたりはしていない」
「でも」萠黄は舌がもつれるのも構わず、ここが正念場と言葉を続ける「お母さんと別れたんでしょ？」
すると父親の返事は意外なものだった。
「戸籍上は、今も父さんと母さんは夫婦だ」
「え」
萠黄は自分の耳を疑った。
「母さんが何と言ったか知らないが、事実だ」
「――死んだよ」
今度は父親が驚きの声を上げる番だった。
「――殺された。迷彩服に……リアルキラーズに。わたしも殺されそうになった」
「……そうだったのか」
父親は手を額に当ててうなだれると、そのまま壁に寄りかかり、ずるずると床に座り込んでしまった。
萠黄は責める眼差しで近寄ると、
「ねえ教えてよ。別れてもないのに、どうしてお父さんは出て行かなあかんかったの？」
「それは……お母さんに懇願されたからだ」

「懇願？」
「お母さんはこう言った。『わたしなんかにあなたの妻でいる資格はありません。どうか別れてください』とな。こんな時代に嘘みたいな話だが、本当だ。私は母さんの真意を問うたが、自分は無学な人間だからと繰り返すばかりだった。
確かに母さんの実家は貧しくて兄弟も多かったため、母さんは中卒で働きに出なければならなかった。母さんはああ見えて苦労人なんだよ。
父さんと出会った時、母さんは大学のそばのレストランでウエイトレスをしていた。それはそれは清楚で気品ある女性だった。父さんは友人たちと母さんの争奪合戦を繰り広げたものさ」
（清楚？　気品？　あの母が？？？）
父親は思い出をまさぐるように言葉を続ける。
「当時の父さんは今よりもっと痩せていて、貧相という言葉がピッタリの風采の上がらない男だった。なのに父さんが母さんを射止めた時、一番驚いたのは友人たちではなく父さんだった。母さんと結婚できた父さんはおかげで自信を持つことができ、それまで以上に研究に邁進することができたんだ。恥ずかしい話だが、それまでの父さんは何をやっても自信の持てない、ダメ男だった。父さんが今あるのは母さんのおかげだ」

「……」
「しかし父さんは浅はかだった。もっと母さんのことを考えてあげるべきだった。
父さんの研究業績が国内外で認められ多忙になるにつれ、家を空けることが多くなった。家庭を顧(かえり)みなくなっていった。……母さんがいつから塞ぎ込むようになったのか、それすら父さんは知らない。
そうしているうちに、とうとうあの日はやってきた。父さんがノーベル賞候補にリストアップされたという極秘情報を、海外のマスコミが一面スクープした日だった。
母さんは『自分には資格はない』と離縁を申し出た」
萠黄にとって初めて聞く話だった。母親は一度たりとも、父さんとのことを話してくれはしなかった。
「そうか、母さんは亡くなったのか……」
父親は両手で顔を覆った。
萠黄は突如発生した情報の洪水に溺れていた。
父親の語ったことが本当ならば、ふたりは未だ夫婦なのだ。そして父親は家を出たものの離縁だけは承知しなかった。母親が旧姓に戻らなかったこともそれで説明がつく。
「あのぉ、エレベータにお乗りいただきたいのですが」
和久井助手のか細い声が、父と娘を現実世界に呼び戻した。

萠黄は考えるのをやめた。今はあれこれ思い悩んでいる時ではない。
「行こう、お父さん」
そう言って父の腕に手を通すと、無理矢理立ち上がらせた。何年ぶりかの親子の触れ合いだった。

12

検査はスムーズに運んだ。エックス線撮影から始まり、説明されても仕組みの理解できない装置による検査は十数項目に及んだ。それでもおおむね順調に進み、これで最後という検査に到達するまで五十分とかからなかった。
おそらくそうなるように、父親が萠黄を呼びにいく役割を買って出たのだろう。萠黄には判っていたが、それでもかまわないと思った。実際、検査は手慣れた検査官を押しやって、父親自らおこなってくれたし、そのほうが萠黄にとっても説明を聞きやすく好都合だった。
「これまで何人のひとが、ここで検査を受けたん？」
白い壁で区切られた検査室には、ベッドの他に各種測定装置が所狭しと置かれている。
ベッドに横たわった萠黄の身体は、さまざまな装置や電極につながれていてほとんど身動きがとれない。頭だけを動かして、窓を隔てた数メートルのところにいる父

親に訊ねかけた。
《伊里江真佐夫君を含め、萠黄で四十五人目だ》
父親の声は、頭に取り付けたインカムのマイクを通して返ってくる。
「その中にリアルは、いてなかったん？」
《君たち以外、ひとりもな》
やはり、そうやすやすと発見できるものではないのだ。一億数千万人の中でたった十二人。自分だって出会ったのは番外の伊里江だけなのだ。メールで呼びかけた候補者の中に、果たして本物のリアルがいるのかどうか。いやそれ以上に、この京都まで日数以内にたどり着いてくれるかどうかも疑わしい。
考えてみれば、明るい材料など大して存在しない。転送装置が数日のうちに完成して、自分は元の世界に帰れたとしても、たったひとりのリアルが残っていれば、元の世界共々吹っ飛んでしまうのだ。
いつでも帰れるのだとしたら、自分は一番最後に帰りたい。安心をお土産にして、ヴァーチャル世界に別れを告げたい。
でも、その後、この世界は……？
「お父さん」
《なんだね》
「リアルがいなくなった後、この世界はどうなんの？」

《そんなこと、萠黄が心配するに及ばないよ》
父親は計測データを画面で追いながら答えた。
「聞いときたいねん。だってわたしをここまで助けてくれた友達もいてるんやから」
《大丈夫だ》父親は萠黄に笑顔を向けた。《そのために、この施設があるんだからね》
「えっ、エネ研って、転送装置を作るためだけにあるんやないの？」
《まさか！　確かに転送装置の開発には多くの人手が必要だが、これほどじゃあない。研究員の半数以上は、今後の世界のありようについて取り組んでいる》
ずいぶんと曖昧な表現だなと萠黄は思った。彼女は気持ち、声を落とすと、
「〝リアル以後〟っていうんやね。さっき、お父さんの会社の人が話してるのを聞いてしもた」
《副社長か。あの人は声が大きいからな》
そう言うと父親はマイクを切り、ドアを開いて測定室に入ってきた。窓には他の人間の姿も見えるが、室内の声は漏れることはない。
父親は手近の椅子に腰かけると、
「ウチの会社、伊椎製作所が大手の仲間入りをしたのはあの人の手腕によるものだ。それは否定できない。やり方には賛同できない部分も多いが」

父親は声に不快感をにじませた。かつて「そんなもんだ」が口癖だった父が、そんな声を吐いたことは一度もなかったが。

「お父さん、変わったね」

「あの頃は、明生(あきお)社長がいたからなあ。ハハハ。社長は私のことをすごく買ってくれてね。私がノーベル物理学賞で、五人目の日本人受賞者になれたのは、ひとえに明生社長のおかげだよ。なのにあの副社長が口出しするようになってからというもの、社長を実権のない会長職に追いやるわ、あくどい金儲けに走るわで――」

父親は言葉を切った。さすがに娘の前で語る話ではないと自重したらしい。

萠黄は父親の苦闘の道のりを垣間見た気がした。

「リアル以後がどうなるか、聞きたいんだったな」

「うん」

父親はかさついた両手をさすりながら、

「要は、怪我をしても人間の身体が砂状化現象を起こさない方法があるかないか、これに尽きるんだ。私は、それは可能だと思ってる」

「ホントに!?」

萠黄は驚いて起き上がりそうになった。

「まだ理論の段階だがね。――父さんはバーチャル世界、つまりこの世界がどんな世界なのか、それを探るところ

からスタートした。萠黄も知っているように、大怪我をすると人体は砂になって崩れてしまう。だがちょっとした怪我ならば、軽く砂が飛ぶ程度で、ふつうの怪我とさして変わらない。ではこのふたつの間にどんな相違があるのか？」

「自然治癒できるぐらい軽い怪我かどうか、かな？」

「いい線だがそれではすべてのケースを説明できない。調査した中には、少なくない出血が起きた状況でも砂状化が起きなかった例がある。判るかな？」

萠黄は首を振った。見当もつかない。

「出産だ」

「あ」

「帝王切開でも砂状化は微々たるものだった。不思議だろう？　また、ある工場で起きたケースでは、工員が指を第一関節から切断する事故が起きた。彼の姿は二十分で砂に変貌した」

「……」

「これらをすべて説明できる仮説があるのだろうか。私のプロジェクトチームの出した答えはこうだ。『砂になるのは予見できない怪我の場合である』と」

「予見……じゃ、覚悟があればどんな重傷を受けても助かるっていうの？」

「それは無理だ。命に関わるような場合は、リアル世界

でも命取りだろう？」
「でも――例えば銃で撃たれたとして『大したことない、こんなんかすり傷や』なんて自己暗示をかけたら？」
「うーん、ダメだった」
「だった？」
「自ら志願して実験した猛者がウチの会社にいたんだ。胆力のある男で、おまけに実験の直前、催眠術までかけさせた上で、指を切断した」
「げっ」
「直後はまったくと言っていいくらい砂は出なかったので、我々も不謹慎ながら万歳を叫んだほどだった。ところが切断した指をくっ付けるべく、準備していた手術台に乗せたところ……指どころか、手首がはじけ飛んだ」
「――！」
萠黄はその様子を想像し、恐れおののいた。

13

父親は軽く首を振ると、
「彼の身体は一時間後にこの世から消えた。得られた教訓はただひとつ。生半可な小細工では、この現象に太刀打ちできないということだ。催眠術や精神力では、助かる怪我かそうでないか、人間のＤＮＡに刻まれたその記

憶を消すことはできない、ということだろう」
「そんな――だってお父さん、さっき可能やて」
「ああ言った」
「もう！」萠黄は寝たまま憤慨した。「ちゃんと教えてよお」
「すまん。じつはまだ検証を始めたばかりの仮説なんだ。だから――」
「それでもええから」
「判ったよ」
父親は頬を赤らめた。久しぶりの親子の会話が彼に生気を与えていることは間違いない。
「私は、砂になった直後の人体、今の場合だと指だが、これを精密に分析した。この時初めて、人間の細胞が砂に変わっていく様子を見ることができたんだ。それはまるで、そう、一個の細胞が生きる意思を失っていくように見えた。細胞膜は破れ、何もかもが干上がっていく。生きることをすっかり諦(あきら)めてしまったかのように」
父親は足を組むと、天井を振り仰いだ。萠黄は次の言葉を待ちわびて、ひたすら息をひそめていた。
「私は考えた。ヴァーチャル世界の人間は、数日前、ブラックホールによって生成された時、その意思の力を細胞から奪われたのではないかとね。ならばその逆をおこなえばいいのではないか。もう一度ブラックホールから

その力を細胞に注ぎ込んでやればいいのではないか」
父親はふっと肩の力を抜き、萠黄に視線を戻した。
「我が社から派遣された研究員が、今ここでやっている実験はそれなんだ。ブラックホールが出すエネルギー粒子を細胞に放射することで、砂にならない力を注ぎこもうとしているんだ」
萠黄は感に堪えないといった顔で父親の姿を見直した。自分の父は、まさに人類を救う方策を日夜模索しているのだ。父は人類のヒーローだ。萠黄は生まれて初めて、肉親に対して尊敬の念を感じていた。
それもこれも、父親と親しく話し合う機会ができたからだ。この事件がなければ訪れることもなかっただろう状況。いや、それだけではない。
萠黄はずっと思っていた。父親に再会したら、ああも言おう、こうも言おうと。これまでに溜め込んだ恨みつらみを全て吐き出し、謝るまで何度も浴びせかけてやろうと。
そんな負の思いはいつしか雲散霧消していた。いや、父親が地下五階に訪ねてきた時から、そんなものはどこにもなかった。
あのせいだ。思い出すのも恥ずかしい醜態。久保田に抱きついて無理矢理キスし、廊下で大声を張り上げ、むんや伊里江に迷惑をかけた一件。あの時に感じた高揚感

が、まだ身体の中に残っている。それがなければ父親に会おうともせず、どこかに隠れていたに違いない。伊里江は地震の副作用みたいに説明していたが、結果的には良いほうに働いたわけだ。怪我の功名以外の何ものでもない。

トントンとドアをノックする音がして、萠黄は我に返った。

父親の部下がコンピュータのプリントアウトを持って入ってきた。父親と二言三言言葉を交わし、部下はすぐに出て行った。

「終了だ。計測結果が出た」

萠黄は腕や足の電極を取り外すと、ベッドの上に起き上がった。

「どう？　間違いなくリアルでしょ」

「うん。正真正銘のリアル様だな。おや？」

父親は小首を傾げると眼鏡を外し、プリントアウトに顔を近づけた。

「なんか変な結果でも出た　脂肪値が高過ぎとか」

「足りない……」

「足りない？」

父親は信じられないといった顔で萠黄を見た。

「ここに現れた数字を信用すれば、萠黄の中で増大しつつあるエネルギーが、予想よりも少ないんだ」

「意味がよう判らへんねんけど……」
父親は突然立ち上がると、ドアから外に出て、またすぐ別のプリントアウトを持って帰ってきた。
「これは伊里江君の検査結果だ。萠黄は彼と同じ日にこちらの世界に来たんだったな？」
「そうやけど？」
父親は二枚の検査結果を目の前に並べ、目を行ったり来たりさせている。
「これによるとだな。伊里江君の体内エネルギーは予想どおり増えている。つまりあと九日で臨界に達する」
九日後。それは伊里江兄の告げた『二週間後』に相当する。
「ところがだ。萠黄の数値では、あと十一日後になるんだよ」
「――二日分足りない」
「そうだ。これはとても奇妙なことなんだ。理論的に有り得ないのだが、何か心当たりでもあるか？」
エネルギーが足りない。それはイコール、この世界が吹っ飛ぶ日を先延ばしにできるということだ。まさに驚天動地の出来事と言っていい。
しかし、なぜ――？
二日分、足りない。二日。二日。二。2。
「あっ！」

「どうした？　何かあったか？」
萠黄はあることに思い至った。
自分が引き起こしたのかもしれない〝二度〟の地震に。

〈第十三章につづく〉